
空の冒険記

影夜洋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の冒険記

【Nコード】

N9722D

【作者名】

影夜洋月

【あらすじ】

故郷を滅ぼされた青年が、心の空白を埋めるためにために冒険する物語。

プロローグ：過去

城が少しずつ炎に包まれていく。

大人は逃げまどい、子供は泣きわめく。

城を守るはずの騎士団は全滅し、この大地にいる人間達は死に行く運命だった。

ここを攻めるものたちは、魔族と呼ばれる人間にとって天敵の種族。生き残りはいないはずだった。

「リリス様、もうそろそろ人間たちも死に絶えましょう。誰か戯れに生け捕りにしておきましょうか。」配下の魔族、コーザが言った。生け捕りと言ってもただ目の前で八つ裂きにされるだけである。

「いや、よい。」

彼女リリスは初めからやる気はなかった。人間の土地を侵略しても、ただ魔族は恐ろしいと評判がたつだけで、屍が横たわる大地が増えるだけ。そう思っていた。

「ん、なんだ？」

少し離れた所に一人11〜13歳の子供がいた。周りの配下は城下町に行っていて一人だけ。運が良ければここにも来れただろう。その運もリリスのところにいるという不運に消されてしまったが。

「どういたしましょうか？」

魔族は好戦的だというが、確かにこの配下は子供を八つ裂きにした
いという感じだった。

「好きにしる。」

興味無いという感じで無機質にリリスは言った。

毎回毎回この繰り返し。今回は珍しかったがまたいつものように死
体が出る。後の処理のため城へ向かおうとしたときだった。

「そんなバカな・・・」

その子供は、鈍い光を放つナイフで魔族の首を切っていた。

人間と魔族は外見は皮膚の色以外あまり変わらない。ただ身体能力
が断然違っている。人間が赤ん坊だとすれば、魔族は大人並で、し
かも魔力と呼ばれる魔法の源も魔族のほうが多い。

他の種族と比べてもかなり身体能力が高い魔族を殺すこの子供は何
者か。

それにこの子供の眼はリリスが味わったことのないほどの殺気を帯
びていた。

「貴様が指揮官か」

子供らしからぬ口調に少し驚いたが、返事をした。

「ああ、そうだ。」

配下のものは殺されたが、リリスは魔族の王族の血が入った貴族である。そう簡単には負けないはずだ。リリスが愛用の剣を抜こうとしたときだった。

ドサッ

子供は倒れていた。どうやら体力の限界だったようだ。

しかもちょうど他の配下達が、来たところだった。

「どうなさいましたリリス様？すでに城は落ちましたぞ。」

「何だ？こいつ。リリス様、やっていいですかこのガキ？」

「おいおい。なんでコーザがやられているんだ？まさか人間の子供にやられたのか？」

どうしたものかとリリスが考えていると、思いついたことがあった。

「ああ、すぐ行こう。それとこの子供は放っておけ。」

「しかしリリス様、こいつはコーザを殺したのですぞ。」

「戯れだ。それとも私の命令に不服があるのか？」

「いえ・・・」

配下達は従うしかなかった。魔族は力が上下関係を示している。配下の彼らが何をしようと意味がないのである。

「まさか、初めての命令がこれだとはな。」

リリスが人間に興味を持った日のことであつた。

この子供はいつしか動乱の渦に巻き込まれることになる。そして魔族にとっての死神になる事をまだリリスは知らない。

プロローグ：過去（後書き）

初めて小説を書きますがよろしくお願いします。

プロローグ：現在

「酔ったかもな」

彼キリスⅡクルハードは冒険者の町トータスに行く定期馬車の中で言った。

彼が何故この馬車に乗っているかというところ、数日前に戻る。

「数日前」

「旅に出たいんだが。」

キリスは、育て親である神父レイⅡベルドルドに話した。

「それはまた急ですね。何かあったのですか。」

ゆったりとした口調でレイが言った。

「あんたに拾われてから、この生活にも慣れたが・・・何かが足りないんだ。具体的には言えないんだが。」

「まあ思春期ですからね。色々あるんでしょう。あなたの場合は5年前のことを引きずっているのでしょうかね。」

「・・・」

キリスは今年で17歳になるが、あの時のことは鮮明に記憶している。炎に包まれる城下町、魔族に殺される親しい人々。城壁の門から出てからがよく覚えていないが。

「あなたを見つけたのは奇跡と言ってもいいかもしれませんね。もし、私が気まぐれで近くを通らなかったら生きていなかったでしょう。」

「感謝している。あんたのおかげでいろいろ学べたしな。」

レイは何故かいろいろなことを知っている。短剣の扱い、魔法の使い方、哲学的なこと・・・彼がいなかったら何も考えずにただ魔族に復讐していただろう。キリスにとってレイは尊敬できる人の筆頭だった。しかし・・・

「それではこれで馬車の乗車券を買ってきなさい。」

レイはウイン銅貨を1枚渡した。

「あんたが冗談を好きなのは知ってるがな・・・。これはないだろうが！子供がおやつを買うんじゃないんだぞ！」

ウイン銅貨＝100円ぐらい

「私は本気です！」

「真面目にやれ！」

コントになっている彼らだった。

「出発の日」

「それでは行つてらっしゃい。たまには戻つてきてくださいね。」

「ああ、行つてくる。」

とりあえず出発の準備ができ、旅に行くことになった。持ち物はあまり無かったのだが教会の近所の方々がお祝いだとかで色々やつてくれたので、出発が遅れてしまった。

「それと三つほど言いたいことがあります。」

「なんだ？人が行こうとしたときに。」

「一つは、一応あなたは姓を隠したほうがいいでしょう。」

解説していなかったがクルハード家は古い貴族の家柄であり、かなり有名である。隠さなくてもいいのだが、とある組織には貴族をかなり敵視しているものがあり没落した貴族さえも殺すという暴挙にいたっている。

「二つめは、出来るだけ友好的に相手と話すこと。無愛想に話していると仲間も集まりませんよ。」

旅には危険が伴う。魔族だけでなく、魔物という凶暴な生き物がいったり、病気になったときなど様々なことがある。できるだけ仲間を連れていくのが鉄則となっている。

「昔のあなただったら心配でしたがまあ今なら大丈夫でしょう。ツッコミを鍛えたかがありました。」

（そうなのか？多分嘘だろうが。）

「三つめは・・・自分をすべて大事にしてくださいね。」

レイの顔が悲しみを持ったような気がした。

すべてという意味がよく分らないがとりあえず、うなずいておいた。

「ああ、すべて了解した。それじゃ行ってくる。」

馬車のほうへ行こうとしたときだった。

「ああ、忘れるところでした。」

「何だ？」

「これを。」

レイは紙袋に包まれたものを渡してきた。

「それには剣が包まれています。短剣で旅をするのは難しいですよ？」

人間相手ならいいが、魔物などは生命力が高いため短剣だと不利なことが多い。

「いや、向こうに着いたら買おうと思っていた。あまり扱ったこと

がないが。」

「私は剣を使えませんから教えてないですからね。私が教えた短剣の扱いは・・・まあ、あれですからね。あまり使わないに越したことはないでしょうから。」

「それじゃ今度こそいつてくるな。」

「あなたに神のご加護がありますように」

最後に神職らしい言葉をレイはケイオスに送った。

（現在）

「あれがトータスか。」

冒険者の町らしく町は遠目に見てもにぎやかだった。

ここから冒険が始まる。新しき冒険者を祝福しているように、空は快晴だった。

ブログ：現在（後書き）

初めてだから投稿するたびに緊張しますね。でもがんばって最後まで書いていきたいと思います。

第1話：仲間

人ごみの中に、新しき冒険者がいた。

（疲れるな、ここまで人がいると。）

ケイオスは馬車を降りた後、冒険者ギルドに向かっていた。冒険者ギルドは冒険者を登録する所で登録すると、依頼が受けられたり、旅の仲間を探せたりと便利な仲介業者である。

（あの建物か？）

建物が色々ある中で一際大きな看板がかかっており、すぐ見つけることができた。

トータスの冒険者ギルドはかなり有名で周りの村や町から人が登録をしにきたり、仲間を探しに來たりするので冒険者の町という名がついた。それゆえにギルドにいる人の数が尋常ではない。列はギルドの入口近くまで続いていた。

中に入ると、列は長いが横幅はそれなりにあり、待つことだけ気にしておけばいいようだ。

ケイオスは冒険者登録をする1〜6番の受付のうちの一番空いている4番に並ぶことにした。

「最後尾はこちらです。」

「押さずにゆっくり前へ進んでください。」

「その人ー。ちゃんと一列に並んでくださいーい。」

ギルドの役員が頑張つて叫んでいる。そのおかげで列の形は整っているようだ。ただ、ところどころ割り込みをしようとしている者がいたりしている。

喧嘩にならないのかとケイオスが思っていると、思っているとうり、

「ちょっと割り込まないでよ！」

「俺は最初から並んでたぞ！言いがかりはやめろ！」

ケイオスの近くで喧嘩が起きていた。喧嘩は三番の列のケイオスの隣で起きており、その様子がよく見える。喧嘩をしているのは魔法使いらしき女の子と荒くれ者らしき男だった。

「おい、どうしたんだ？兄貴」

6人程荒くれ者の仲間がきたようだ。周りの人は数のせいとその様子を遠目に見ており、役員は近くにいない。

（並び順ごときで。）

ケイオスがあきれていると、助けようとする者がいたようだ。

「や、やめたほうがいいんじゃない・・・。」

言いきる前に殴られた。しかも気絶したようだ。

（しょうがない行くか。）

人を助けるという高尚な思いでなく、ただそういう人間が嫌いなだけである。

「おい、やめ・・・」

さっきのようにケイオスが言いきる前に拳が飛んできた。避けて蹴りを腹にいれたが。

「てめえ、よ・・・」

定番の言い方なので言いきる前に顔を殴っておいた。最初にこういうことをやったのもこいつなので自業自得だろう。そいつは急所に拳が入り戦闘不能になった。しかし、同じ手は通じないだろうし、後6人残っている。

「手伝おう。」

ケイオスと同年ぐらいの青年が加勢に来てくれた。どのくらいやれるのだろうか。

「一人来たぐらいで何になる。やっちまえ！」

荒くれ兄貴がそういつたときだった。

「はい、やめてくださいねこついの。」

役員の人が立ちふさがった。というか周りはいつのまにか警備員らしい人たちに囲まれている

「外に出てくれますか？」

笑顔ながらも殺気を感じる。おそらく忙しい中でこんなことがあったので内心怒りが煮えたぎっていることだろう。

「貴方達もです。」

ケイオスの方を向いてそう告げられた。

（やるんじゃないかった。おそらく弁解しても）

「俺たちはそこにいる女の子を助けようとしただけです。罪はありません。」

「喧嘩したということに変わりはありません。出て行ってください。」

（分かり切ったことをいうやつだ。）

「女の子っていうけど私17よ。」

「そこを言うのか。」「ケイオス達がツツコミを入れた。」

「そうじゃなかった。この人達は私を助けてくれたんです。皆さんそうでしょ？」

女は周りの人達に同意を求めた。

（なるほど、その手があったか。）

周りの人はそれぞれに。

「そっちの荒くれ男達からもめ事を起こしたんだ。」

「俺は見たぞ。その男達の兄貴とやらが割り込んだのを。」

「2人組の方は女を助けようとしたんだ。」

人には集団意識があり、集団で行動を起こすとみんなそれに同調すると聞くが、今がその状態だろう。場の雰囲気荒くれ達がただ悪いという感じになってきた。

「分かりました。ではその荒くれ達はギルドから出入り禁止。青年達は不問にします。」

面倒になったのか役員はそう言う周囲の警備員に荒くれ男達を外に出すよう指示した。

「はあ、なんとかなったな。」

「並び直しだな。」

喧嘩騒動の中心人物の3人は列から外れていた。

「助かったわ。ありがとう。」

「いや、当然のことはただけだよ。」

「あいつらが気に食わなかったただけだ。まあ、助けようとも思った

が。」

レイに言われたことを思い出して一応そう付け足しておいた。

「私はキュリスⅡリエトラン。あなた達の名前は？」

「スコルⅡアルベウスって言うんだ。」

「ケイオス・・・ベルドルトだ。」

（まあ育て親だしな。こう名乗ってもいいだろう。）

偽名にレイの名前を使っておいた。

「まったく。女性に優しくするということを知らないのかしら。」

「まあ頭が悪そうだったしな。しょうがないさ。」

あいずちをうっておいた

「いきなりなんだが登録もしてないけれど、この3人で組まないか？結構気が合いそうだしな。」

スコルが提案してきた。

（一から探すのも面倒だ。いいかもしれないな。）

「確かにね。それじゃ組みましようか。」

「俺もそれでいい。」

そうして3人は組むことになった。大体組む人数は3〜8人が多いので、旅に出る人数は揃ったようだ。

「さて、並び直しか・・・」

列は計ったように、来た当初よりも長くなっていた。

第1話：仲間（後書き）

頑張っ て書いていますが、2000字がやっとです。上達するには
時間がかかりそうです。が、ひき続き読んでいってください。

最終話：旅の目的

ケイオス達は登録を済ませた後に、大通りで話ながら宿屋へ向かっていた。

「そういえば、みんなの旅の目的って何なんだ？俺は修業のためなんだけど。家は道場をやっていて、親父が言うからには、アルベウス家の男子は必ず各地を回りいずれ師範となるための修業を積むのだ。とか言われて無理やり行かされた。」

「大変ね。私は魔道の研究のためにいろいろな所を回るため。魔導師は自分の魔法の研究を欠かさないためにいろいろやるのだけれど、金持ちならともかく庶民は旅をしながら材料とか資料を探さないといけないのよ。」

「・・・みんな目的があるのか。」

ケイオスにとっては、自分でもそれがよく分つてはいない心の空白というものを探しているので彼らと疎外感を感じた。

（魔族への復讐心でもあればよかったのにな。）

故郷が滅ぼされれば、復讐心が生まれるだろうに思うのだがケイオスにはそのような気持は無く、ただ何かがないだけだった。

「ケイオスはどうなの？」

ただその何気ない問いかけに、今は苛立ちを感じる。

「俺は・・・」

ケイオスが言葉を返そうとしたときだった。

「おい、お前ら。」

誰かと思って振り返ると、そこにはギルドで列に割り込んできて争いになった荒くれ達の兄貴だった。

「あんた復讐しに来たってわけ？」

いつでも争えるように構える。周りの通りすがりはこちらをちらちらと見ながらも、歩き去っている。冒険者が出入りしているこの町はお世辞にも治安がいいとは言えない。おそらくはこういう光景には慣れているのだろう。

「いや、謝りに来たんだ。列に割り込もうとして悪かった。許してくれ。」

そう言うのと荒くれはケイオス達の向かっていた方向と反対の方向へ歩いて行った。突然謝ってきたので少しの間ケイオス達は啞然としていた。

「まさか謝りに来るとは・・・。」

「うん。ああいう輩ってそういうことをするものだったけ？」

「とりあえず宿屋へ向かおう。気になることだけど。」

スコルの一声で宿屋へと歩き始めたが、途中会話はあまり入らなか

った。

「宿屋 テイス」

宿屋テイスは、各町に一つあると言われている大きい宿泊企業で、よく冒険者などが使う宿屋である。そこにケイオス達は泊まることにした。

受付を済ました後、階段を上って借りた部屋に行く。部屋は4人部屋で、窓が付いており、その前にはテーブルと椅子もあった。

「なんか釈然としないなあ。」

キュリスがベットに倒れこんでそう言った。

「上辺だけじゃなくて、本気で謝ってたようだね。」

スコルとケイオスは椅子に座った。外はまだ昼で人通りはまだ途絶えていなかった。宿に泊っている冒険者が通りにある商店などで買い物をしている。

「少し外に出てくる。」

ケイオスは通りの隅にとある集団を見つけたので外に出ることにした。

「よう、どうしたんだ。」

見つけたのはギルドでもめた荒くれ兄貴の取り巻き達だった。

「よう、じゃねえよ！この野郎！」

「お前らのせいで兄貴が冒険者ギルドに出入り禁止になっちまったじゃねえか！」

「どうしてくれるんだ！」

こいつらの兄貴は謝ってきて自分達は復讐をしてくるとは。そういえばこういうやつらが何故ギルドにいたのだろうか。ケイオスは質問してみた。

「なあ、何でお前らの兄貴とやらはなんで冒険者ギルドに居たんだ？」

「兄貴はなあ！借金の取り立て屋から足を洗って真つ当な人生を歩もうとしたんだよ。それをお前らのせいで登録できずに冒険者って認められねえ状態で旅に出ないといけなくなった。俺達はお前らが許せねえ。」

「確かにそれは悪いことをしたかもしれないが、列に割り込んで騒動を起こしたのはそっちだが？」

「そ、それは・・・」

荒くれ達は黙ってしまった。

「すまん。たびたび迷惑かけちゃって。」

荒くれ兄貴が仲間を探していたのか、駆けつけてきた。こいつが何

故冒険者になりたいのかも興味湧いた

「あんたに聞きたい事があるんだが、何故取り立て業から足を洗おうと思ったんだ？」

「それは・・・。」

彼が言うにはこうだった。

一週間程前に、とある家へいつもの通りに借金の取り立てに行った。その家についた時には既に家の主は逃げていてその子供だけが冒険者の物語本を読みながら帰らぬ親を待っていた。規定には逃げられた家は、そこにあるものをできるだけ売りさばいて金にしろ。という事になっていたのだがこの国の法律では奴隷は売買禁止とあり子供の持つている本も古びていて金にならないということである。そのまま家の外に放り出すことになった。数日後にその子供は本を持ちながら路地裏で死んでいた。彼はその時こう思ったらしい。

「まだ俺が小さい頃に、借金の問題で親に捨てられたんだ。俺はスリとかして生きてたが、同年代の大多数はそういうことが出来ずに死んでいった。それを思い出してさ。今のような事はやめて普通に暮らしていこうと思ったんだよ。そして子供の頃になりたいと願っていた冒険者になろうと決意したんだ。だが・・・俺の性格からして無理だったのかもな。」

後ろで取り巻き達が泣いている。このような事情があるならば黙ってはおけない。ケイオスは普段は無愛想だが、こういうことになるかと熱くなる。

「まだその志は生きているか？」

「捨てきれないな。こういうのは。」

「それなら行くぞ。もうすぐギルドが閉まってしまふ。」

そう言うとケイオスは彼らを連れ、走ってギルドへと向かった。着いたところには日が沈みかかっていたが幸いギルドはまだ開いていた。

「おい、そのこ！お前らはギルドに入っではいかん。」

「頼む！入れさせてやってくれ！」

ケイオスは頭を下げて警備員に頼み込んだ。

「俺達からもお願いします！」

取り巻き達は土下座までして頼み込んでいた。

「そ、そんなことされても……。」

「入ればいいんじゃないですか。」

誰かと思えば彼らに出入り禁止を告げた役員だった。

「入口でそういうことされると迷惑なんですよ。だから言っつまみだそうとしてもあきらめそうにありませんし、面倒ですから早く用を済ませてください。」

面倒だからと言って仕事放棄するのはどうかと思うが今はそれに深く感謝する。

「ありがとう。」

そう言って冒険者になりたいと願った彼はギルドの中へ入って行った。

「さてと、帰るか。」

走ってきた道を戻っていく。ケイオスは少しだけ心の中の空白が埋まったような気がした。

「どこ行ってきたんだ？」

帰ってきたのはもう夜だった。その時の出来事をスコルとキュリスに話した。

「なるほど。そんなことがあったんだ。案外ケイオスって熱いのね。」

「そういえばケイオスの旅の目的って聞きそびれてたな。どうして旅をしようと思ったんだ？」

昼は答えが出なかった。でも今は多分言えるだろう。

「人の役になれたらいいな。と思ったんだ。」

最終話：旅の目的（後書き）

あまりにも文章が下手なので中断することにしました。
修行してそれなりの文章を書けるように努力いたしますので、今後
もよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9722d/>

空の冒険記

2011年1月16日09時22分発行